13.気候変動に具体的な対策を

カーボンニュートラルの取り組み

慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けて

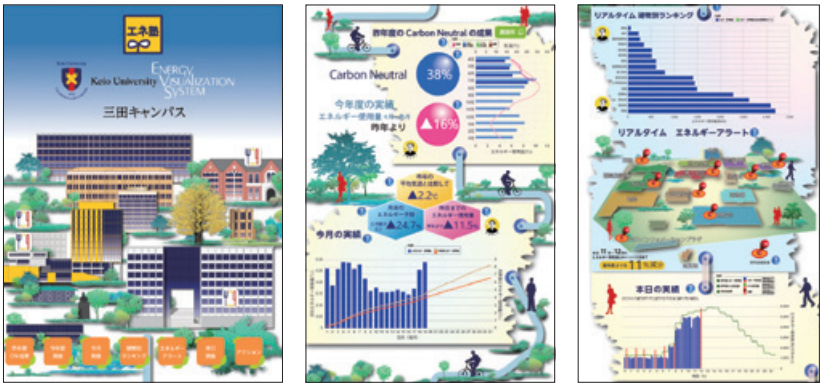
慶應義塾は2030年に電気使用量のすべてを自然エネルギーに転換することを目指します。

慶應義塾大学には6つのキャンパスがあり、大学病院や一貫教育校も含めると、それぞれのエネルギー使用量、使用形態、オンサイト太陽光発電のポテンシャルなどの条件は大きく異なっています。これらのキャンパスの特徴も勘案して、カーボンニュートラルに向けた具体的な検討を行っています。

▶ 2025年度に開始した取り組み

- 「ENERGY VISUALIZATION SYSTEM（エネルギー見える化システム）」公開

脱炭素社会の実現と持続可能な運営を目指し、2025年12月に電力・ガス使用量を合算したエネルギー使用量をリアルタイムで可視化する「ENERGY VISUALIZATION SYSTEM」を三田キャンパス先行で導入しました。本システムは、電力とガスの使用量、CO_2排出量、概算光熱費を合算して一元管理し、パソコンやスマートフォンから即座に確認できるのが特徴です。ダッシュボードには使用量などの推移やこれまでの実績がグラフやランキングで直感的に表示され、学生や教職員の省エネルギーに対する行動変容を促します。また、収集されたデータは授業や研究プロジェクトのオープンデータとしても提供され、学生主体の省エネルギー提案を後押しする教育的基盤としての役割も担います。本システムの活用により、学内のエネルギーマネジメントの高度化を図るとともに、再生可能エネルギーの導入やカーボンニュートラルキャンパスの実現、教職員・学生との協働による環境改善プロジェクトを推進していきます。

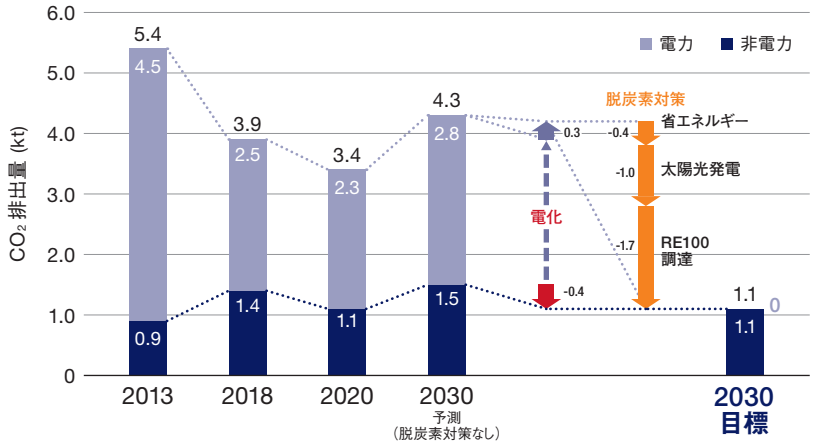


「ENERGY VISUALIZATION SYSTEM」

湘南藤沢キャンパス（SFC）におけるカーボンニュートラル

湘南藤沢キャンパス（SFC）では、慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けたモデルキャンパスとして、自然エネルギー電力への転換を実現するロードマップを作成しました。2030年を目標年として、照明器具のLED化、節電の徹底、建築物の省エネルギー性能の向上などによる省エネルギー、太陽光発電を中心とした再生可能エネルギーの導入、Renewable Energy 100%（RE100）電力の調達などによって電気使用量のすべてを自然エネルギーに転換します。キャンパスにおけるオンサイト太陽光発電のポテンシャル評価を行った結果、建物の屋上やカーポートの屋根などに太陽光パネルを設置することで、約30%のエネルギーを自給可能であることがわかりました。SFCでは、エネルギー自給率向上のため、地域バイオマス資源の発電利用のポテンシャル調査なども計画しています。また、カーボンニュートラルに関連する生物多様性や資源循環などの環境問題についても統合的に取り組んでいきます。

SFCのカーボンニュートラルへ向けたロードマップ



※脱炭素対策は2023年3月時点で想定している内容であり、今後の検討に応じて変更される可能性があります。

湘南藤沢キャンパス（SFC）において、サントリーグループと協働し、「ボトルtoボトル」水平リサイクルを開始

湘南藤沢キャンパス（SFC）は、サントリーグループと連携し、キャンパス内で回収された使用済みペットボトルを新たなペットボトルへと再生する「ボトルtoボトル」水平リサイクルを、2025年9月より開始しました。本取り組みは、使用済み製品を同一種類の製品へと再資源化するもので、慶應義塾内では初の試みとなります。

今回の連携は、「リサイクル適性が高く、再資源化の仕組みが整っているペットボトルを資源として循環させ、持続可能な社会の実現に貢献したい」という両者の思いが一致したことにより実現しました。

SFCでは、2022年11月に2030年に向けたカーボンニュートラル目標を発表し、自然エネルギー大学リーグに加盟しました。さらに2023年からは、サステイナブルキャンパスプログラムを開始し、キャンパスの持続可能性向上をサステナブルな地域づくりへとつなげることを目指してきました。同プログラムは、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、政策・メディア研究科、健康マネジメント研究科、湘南藤沢中等部・高等部が連携して進める教育研究プロジェクトであり、「カーボンニュートラル」、「資源循環」、「自然環境」、「健康と地域」、「食と農」、「スチューデントビルドキャンパス※」、「高等部における環境プロジェクト」の7つで構成されています。あわせて、2023年以降はキャンパス内の分別方法と分別ボックスのデザインを一新し、学生主体で分別率向上に取り組んできました。特にペットボトルについては、キャップ・ラベル・ボトル本体の3分別を徹底し、資源としての品質向上を図っています。

一方、サントリーグループは、2012年に国内清涼飲料業界で初めてリサイクル素材100%のペットボトルを導入し、2030年までにペットボトルの「100%サステナブル化」を達成することを目指して、水平リサイクルの実用化を進めてきました。

今回の取り組みにより、SFCで丁寧に分別されたペットボトルの価値を活かし、より高度な資源循環を実現します。今後は、学生による意識啓発や行動変容の促進を通じて分別率のさらなる向上を図るとともに、キャンパスの持続可能性向上、地域との連携による社会課題解決に取り組んでいきます。



※学生・教職員・卒業生が協働し創り上げる滞在型教育・研究施設

2025年自然科学研究教育センター・シンポジウム「話そう、考えよう、SDGsと科学のこと」開催

2025年11月15日、日吉キャンパスにて、自然科学研究教育センター主催シンポジウム「話そう、考えよう、SDGsと科学のこと」を開催し、約40名が参加しました。本シンポジウムは、2030年までの達成を目指すSDGsに、科学技術がどのように貢献できるのかを参加者と共に考えることを目的に、SDGs関連分野の第一線で活躍する4名をお迎えして講演を行いました。

大沼あゆみ経済学部教授は、技術や生産物が市場に普及する仕組みを具体例と共に解説し、地球環境を支える経済の役割を示しました。続いて、Jリーフ株式会社の上原淳氏は、レタスの植物工場の現状と展望を紹介し、持続可能な食料調達の可能性を示しました。千代田化工建設株式会社の今川健一氏は、次世代エネルギーとして期待される水素の利活用について、コスト面も含めた展望を説明しました。最後に、清水建設株式会社の鵜山尚大氏より、月面太陽光発電「ルナリング」構想と月面建設技術を通じた将来のエネルギー供給の可能性が語られました。

講演後、総合質疑討論が行われました。登壇者と参加者が、2030年以降を見据えて、科学技術の未来像を具体的に構想し、共有する有意義な機会となりました。



銀杏並木とシンポジウムポスター



総合質疑討論の様子

信濃町メディアセンター（図書館）にウォーターサーバーを設置

信濃町キャンパスのメディアセンターでは、学生の多様な「学び」をサポートする環境整備の一環として、2026年3月、利用者からの要望が多かったウォーターサーバーを1階カウンター前に設置しました。マイボトルを持参すれば誰でも気軽に給水でき、館内全エリアへ「密閉可能な容器に入った飲物」として持ち込むことが可能です。マイボトルの利用を促進することで、使い捨てペットボトル等の削減にもつながる取り組みです。

慶應義塾では、今後も全キャンパスでのウォーターサーバーの増設や配置見直しを進めるとともに、認知度や使用率の向上に取り組んでいきます。

土屋常任理事らがRENKEI気候変動・エネルギーワークショップに参加

2025年5月6日～5月9日、英国ニューカッスル大学ならびにダラム大学の主催でRENKEI（日英大学間連携プログラム）による気候変動・エネルギーワークショップが開催され、土屋大洋常任理事、武井良修法学部准教授、和田直樹環境情報学部准教授が参加しました。

4日間にわたるワークショップは、「Just Transitions to a Net Zero World（ネット・ゼロ社会への公正な移行）」をテーマに実施されました。日英両国のRENKEI加盟大学から集まった様々な分野の研究者が、大学・政府・企業・ローカルコミュニティ間の連携事例など、本テーマに沿った多様な研究プロジェクトについて学ぶとともに、グループワークを行いました。グループワークでは、都市環境・産業・政策・気候正義・環境公衆衛生といった視点から、日英の研究者がどのように連携し得るか議論を交わし、学際的な共同研究の可能性を模索しました。



ワークショップ参加者

Hヴィレッジに双子のヤギが入寮―学生主導のヤギプロジェクト―

湘南藤沢キャンパス（SFC）内学生寮「H（イータ）ヴィレッジ」に、双子のヤギ「カイくん」と「マユちゃん」が入寮しました。

本取り組みは、寮生が立ち上げた「ヤギプロジェクト」によるものです。外来種の雑草処理に苦慮していた寮父との会話をきっかけに、雑草を好んで食べるヤギの習性を活かした自然な力による除草の可能性に着目し、企画されました。ヤギの誘致のほか、クラウドファンディング、ヤギ小屋の建設も学生自らが手掛けました。

2頭はHヴィレッジ隣接地での除草を担います。ヤギによる除草は、化学除草剤を用いずに自然の力を活用する方法であり、生態系や土壌の保全にもつながる取り組みとして期待されています。


カイくんとマユちゃん

第24回「森を愛する人々の集い」開催

慶應義塾は、現在全国に義塾所有山林や国有林分収契約山林をあわせ約160ヘクタールにおよぶ山林を保有し、植林・育林活動を行っています。これらの活動を支援する目的で2001年に発足した「福澤育林友の会」主催による「森を愛する人々の集い」が、2025年6月14日に三田キャンパスにて開催されました。当日は同会の会員や学生など、約70名が参加しました。

24回目を迎えた今回は、一ノ瀬友博環境情報学部長が「南三陸慶應の森の自然環境と生物相」と題して登壇しました。講演では、バイオマスや農業、資源循環といった多様な視点から、環境課題の解決を目指す研究や活動が紹介されました。また、大学院生によるポスターセッションも実施され、志津川山林の自然環境と生物相について、活発な意見交換が行われました。


一ノ瀬環境情報学部長による講演

シンポジウム「パブリックヘルス（公衆衛生）の現代的課題を考える」開催

2025年7月1日、三田キャンパスにて、X Dignityセンター主催シンポジウム「パブリックヘルスの現代的課題を考える」を開催し、産業界、官公庁、学術機関、民間団体など多様なセクターから90名を超える参加者が集まりました。シンポジウムでは、SNS利用が子どもの心身の健康に与える影響や国内外における規制・法的紛争の現状、地球環境と人間の健康を一体的に捉える「プラネタリーヘルス」をテーマに、研究者、行政関係者、医療・政策分野の専門家が意見を交わしました。分野を超えた対話を通じて、健康、情報環境、地球環境をめぐる課題に対し、領域横断的な連携を深める重要性を共有する機会となりました。

湘南藤沢キャンパス（SFC）2025年度キックオフレクチャー開催

2025年4月7日、湘南藤沢キャンパス（SFC）にて、新入生・在学生を対象に、学問に取り組む姿勢や社会の変化を捉える視点を養うことを目的としたキックオフレクチャーを開催しました。

2025年度は、一般社団法人エシカル協会代表理事の末吉里花氏に「これからの時代に必要なエシカルという“ものさし”」をテーマにご講演いただきました。末吉氏は、自身の経験を踏まえながら、エシカルの考え方や日常で実践できる行動について紹介しました。質疑応答では、学生からエシカルを自分事として捉える方法など多くの質問が寄せられ、持続可能な社会に向けた意識を深める機会となりました。



末吉氏による講演

塾生会議プロジェクトの活動

塾生会議から提出された提言の中から審査を経て採択されたものは、学生が主体となる「塾生会議プロジェクト」として具体化され、様々な活動へと発展していきます。

コンタクトケース回収プロジェクト

SDGsゴール12「つくる責任・つかう責任」とゴール14「海の豊かさを守ろう」を実現し、2030年までにプラスチックごみを20%削減することを目指すプロジェクトです。独自のアンケート調査から、学生の約60%が使用していると想定されるコンタクトレンズに着目し、コンタクト空ケース回収ボックスを設置し、常時回収を可能にしました。

昨年度は日吉キャンパスのみに設置していた回収ボックスを、2025年度は日吉・矢上・三田・SFCの4キャンパスに常設しました。また、2025年10月1日～12月31日には、回収量上位者に慶應パーカー、カレッジバッグ、ルーズリーフ等を贈呈するイベントも開催しました。結果として、昨年度2,841個であった回収量を12,000個にまで伸ばすことができ、学生の意識と行動が習慣化してきていることがうかがえました。